

『最初のビデオレコーダー』

「学生時代のことを教えてください」とメールが届いたので、2009年に書いたものをご紹介します：  
 ---『最初のビデオレコーダー』---  
 それは14才の時。目がパッと開いた。  
 「家庭用ビデオレコーダー発売」がその広告だった。



当時一番嫌いなのが勉強。  
 二番目は学校。  
 毎日、遊びまくって、暴れまくって、しょっちゅう公務員(教員)に呼び出されても「オレは用がない」と無視。立派な人間に会えるなら喜んで行くが、町から一步も出てない、社会 & 世界経験のない未開人と対するほどの浪費はない。

学校が言う勉強はぜったいしない私には個人教授がいた。それは映画。  
 映画館はお金がかかるから時々しか行けなかったけど、テレビの映画放映は、たんまり観た。そこには、創造性ゼロの学校の授業とはちがって、素晴らしい冒険や新しい世界が広がった。

映画雑誌「スクリーン」で見たその家庭用ビデオレコーダーの広告にさらに夢が広がった。それまではカセットレコーダーをテレビの前に置いて、なんのコードもなしに映画の音を録音していた。  
 夢の録画装置の価格は30万円を超えていた。それは1975年だから、今の100万円くらいな感覚だ。  
 両親は私が勉強をするのを一度も見たことがない。しないんだから見るわけではない。  
 当時、親父とは口をきかなかつた。(今はもったきかない) いつも遊びまくって、時々1時間電車に乗って高松へ映画を観に行く私を彼はひどく気に入らなかつた。  
 お袋には怒っていたらしい  
 「なんでエイジは勉強せんのだ！」と。  
 そのお袋は、私に一度も「勉強しなさい」と言ったことはない。言っても無駄だし、言えばさらにマイナスになるのを知っていた。

「絶対にこのビデオを手に入れる！」それが14才の私の決心。  
 「丸亀高校に入ったら、このビデオを買ってくれるか？」とお袋に「スクリーン」の広告を見せた。お袋が広告を親父に見せた。  
 地元で一番有名な高校に「エイジが合格するわけがない」と考えた親は約束してもまったくリスクはない。親父は約束した。  
 丸亀高校受験の話をする時、担任の公務員は「あんたアホやな！」と笑い飛ばした。

何年も学校の机の中に押し込まれてままだった教科書を開いた。4ヶ月後に合格。  
 喜びすぎた親父はすぐに Sony Betamax ビデオレコーダーを買った。  
 当時、普通の電器店にはビデオレコーダーすら置いてなく、Sony の丸亀支店に注文し取り寄せた。店のスタッフもその装置を初めて見た。  
 1本の Betamax ビデオテープの録画時間は最大1時間。1本は5500円だから2時間の映画1本には1万1千円かかる。テープもその都度、注文取寄せ。  
 映画録画中のテープ交換はコマーシャルのタイミングに行なうから、時計を見ながら気合いが入る。コマーシャルカットもしていたから、右手の人差し指と親指は「一時停止」のレバーを握ったままの2時間。

- 『街の灯』
- 『シェーン』
- 『自転車泥棒』
- 『天井桟敷の人々』
- 『鉄道員』
- 『山猫』



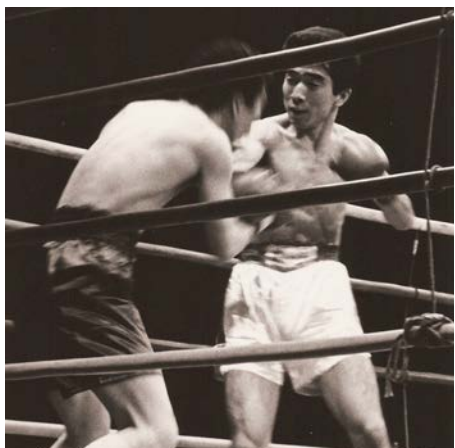
- 『道』
- 『アラバマ物語』
- 『灰とダイヤモンド』
- 『わが谷は緑なりき』
- 『サウンド・オブ・ミュージック』
- 『十二人の怒れる男』
- 『七人の侍』
- 『奇跡の人』
- 『大列車作戦』
- 『まぼろしの市街戦』
- 『大いなる勇者』
- 『俺たちに明日はない』
- 『イージーライダー』
- 『ひまわり』
- 『セルビコ』

島国引きこもり大人たちには、決して教えられない  
 「本当の勉強」が家庭に届いた。  
 高校に入ると、ますます勉強はつまらない。成績はずっとクラスで2番だったが3年生になると1番に。もちろん下からの順番。大学に行くつもりはまったくない。ますます親とはしゃべらなくなつて「もう家にいるのは耐えられない」と思ったから、3年前と似たような作戦に出た。  
 「オレがまあまあ有名な大学へ入ったら生活費を出せるか？」と親へ。  
 大学を完全にあきらめていた親は「どうせ無理だから」と約束。  
 受験する有名大学の名前を聞いた担任は即座に「絶対に不可能だ！」と言いつつ切った。

12月1日は「映画の日」。「よし、これはオレの日だ」と思って、12月1日から教科書の暗記を開始。2ヶ月半後の大学入試で中央大学、法政大学他に合格し、家を出るという念願が叶った。家を出た日は、今でも人生最良の日。

映画を録画するように、教科書の内容を頭に録画してごまかした高校と大学入試。  
 どちらも、もっと映画を観るための手段だった。なんにもわかってないボンクラでも合格できるという試験の大欠陥の証明が私。

あの Sony - Betamax をかかえて船と電車を乗り継いで東京へ。  
 「1日最低2本」を目標に毎日、名画座やアテネフランセ、日仏学院、京橋のフィルムセンターに通う。  
 フィルムセンターは学生料金が130円くらいだったと思う。たったの130円でゆうに無限の価値のある映画の数々を。映画のあと、持ってきたスポーツバッグを肩に、夜は協栄ボクシングジムに通った。当時は具志堅用



▲ 著者 (1982年3月1日、後楽園ホール)

高さんが世界チャンピオン。昼間は世界一の映画、夜は世界一の選手の練習を見た。プロボクサーになっても世界の壁という果てしなく遠く高い城壁を感じながら、最高峰の映画を作った人たちの気骨や勇気を同時に学んだ。

[ボクサーのオレは一生修行しないと]と決めた私は酒・タバコ・キャバレー・パチンコなんていう世界に一滴も、一步も入ってない。  
 [ボクサーのはしぐれのオレは「疲れた」という言葉を絶対に言わない]と決めた。それ以来一度も言っていない。

それは映画が伝えてくれた人間の崇高さ。それは映画が教えてくれた信念の尊さ。そしてボクサーの闘うリングが教えてくれた潔さ。  
 反逆児だが不良じゃない。反体制だがチンピラじゃない。

数多くの格調高い映画のおかげ。生きる意味を、録画して何度も何度も観ることで学んだおかげ。映画一本に1万1千円かかったテープのおかげ。  
 こづかいをためるのにも使うのにも気合いが入っていたから、見方、吸収力がちがう。

今、1枚20円ほどのDVDで映画を何本も録画するが、あの Betamax テープから学んだ真実にはかなわない。今、ハイテクを駆使したマーケティング商品としての映像作品が大量放出されるが、あのテープに収められた数十本の映画にはかなわない。幼い頃、若い頃に学んだものが、その後の自分の血肉になる。  
 2年ほど前、名映画監督のヴィクトル・エリセが言った「今の映画の95%は映画じゃない」  
 本当の映画とは人間や自然の道徳や倫理を描くもの。それはテレビを含め、あらゆる映像作品にも言えること。いい映像は真実を伝え、人の人生を真実にする。



▲ 1983年4月、ニューヨークにて

18才でミカン箱ほどもある大きなビデオレコーダーを抱えて東京に来た私は、48才の今、小型のビデオカメラを腰に世界を回る。世界に暮らす人々を記録するために。

いろいろ教えてくれた世界にお返ししなきゃ。

(Lucky Day)